

自 己 評 価 書

(平成 2 9 年度)

平成 3 0 年 3 月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I 学校の現況及び目標 1

II 重点目標に対する自己評価 2

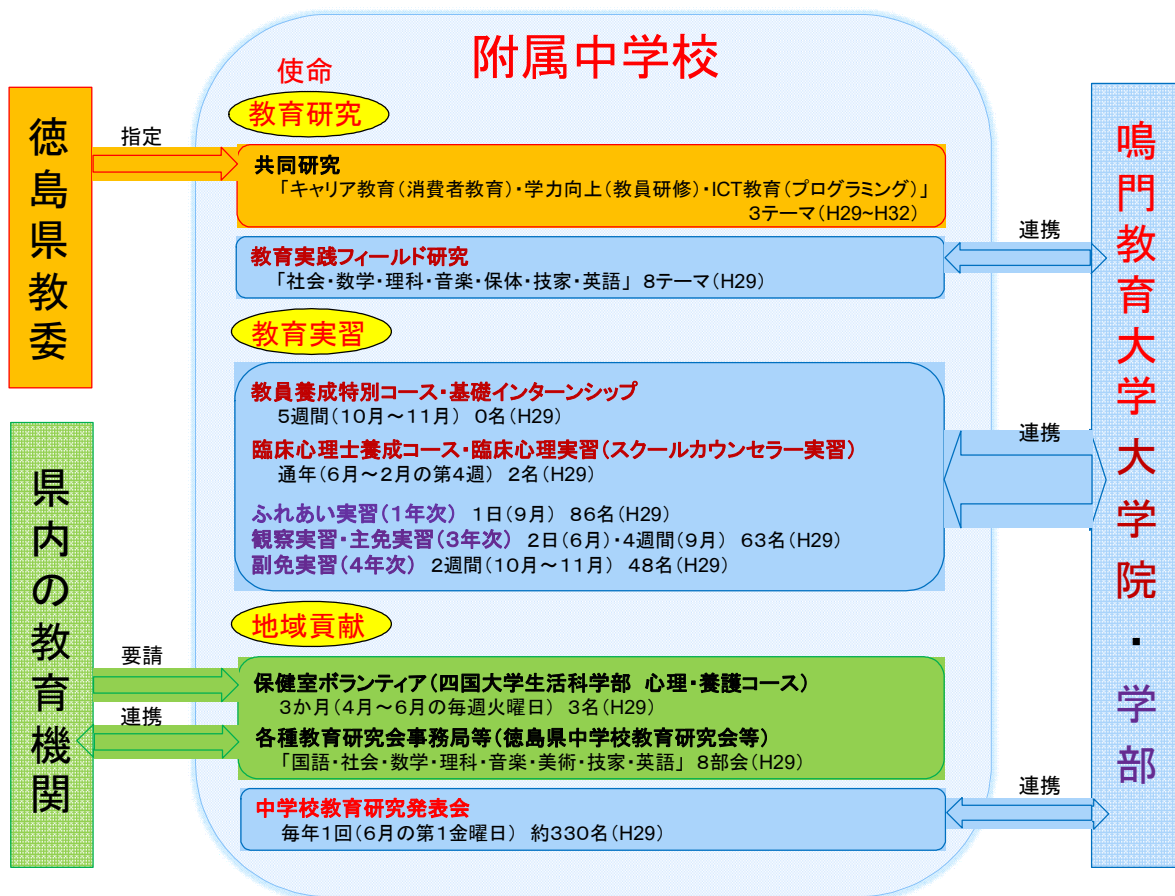
1 主体的・対話的で深い学びの実現 2

2 いじめの防止 8

3 キャリア教育の推進 14

III 自己評価根拠資料一覧 20

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(平成29年5月1日)
 - 生徒数 462人 教員数 24人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強靱な意志と体をもち、たくましく生き抜く生徒
- 優しく思いやりの心を持ち、人につくす生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- 強い使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 平成29年度重点目標（実践事項）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 見方・考え方を働かせる学習指導の充実
 - イ 「何ができるようになるか」を意識した指導と評価
- ② いじめの防止
 - ア 居心地の良い雰囲気づくり
 - イ 生徒同士が繋がる活動の工夫
- ③ キャリア教育の推進
 - ア 気持ちのよい挨拶の実践
 - イ 家庭や地域との連携を深める取組

(4) 平成29年度評価項目（評価指標）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
「先生は生徒が深く学べるように指導している」
「先生は一人一人の生徒に力が付くように指導している」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学習指導」
- ② いじめの防止
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
「学校は生徒が先生に相談できる雰囲気がある」
「自分の子どもは学校で居心地のよさを感じている」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「児童生徒指導等」
- ③ キャリア教育の推進
 - ア 保護者対象アンケート（7月と12月に実施）
「附属中学校の生徒はあいさつができています」
「自分の子どもはあいさつができています」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学級経営・学校運営・校務の処理・その他」

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 主体的・対話的で深い学びの実現

平成29年3月に告示された「中学校学習指導要領」の解説（総則編）には、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指し、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が記述されている。

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。

本校では、これまでの研究の中で得られた成果を継承しつつ、学びの質をさらに高めるための「深い学び」に注目している。深い学びを実現するために欠かせないものが、見方・考え方である。この見方・考え方は、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のことであり、各教科等の学習の中で働くだけではなく、大人になって生活していくに当たって重要な働きをするものであるとされ、中学校の各教科等の見方・考え方は、各教科の学習指導要領解説に詳しく書かれている。

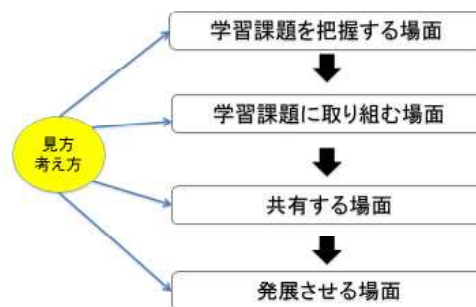
各教科の特質に応じた見方・考え方（例）

- （国語）対象と言葉，言葉と言葉の関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めること。
- （数学）事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え，論理的，統合的・発展的に考えること。
- （美術）感性や想像力を働かせ，対象や事象を，造形的な視点で捉え，自分としての意味や価値をつくりだすこと。

本校では、こうした各教科で「見方・考え方を働かせた深い学びの実現」を図るために、学校全体で共通した授業設計モデルを設定した。

深い学びを実現するための授業設計モデル

授業の流れを「学習課題を把握する場面」から始まり、「学習課題に取り組む場面」「共有する場面」「発展させる場面」の4場面で構成した。教師が授業を構想する際に、生徒の思考や具体的な学習活動、それぞれの場面で働くと考えられる見方・考え方を具体的に考えていくことで、授業改善の際にも有効なモデルとなると考える。このモデルを、単元や題材に応じて、一単位時間や複数単位時間の学習で設定するなど、効果的に位置付けることが重要であると考えている。



授業設計モデル

また、生徒は学習した結果、「何が分かるようになったか」「何ができるようになったか」「何が身に付いたか」などの問いに対して、自信を持って答えられるよう、教師は責任を持った指導を行う必要がある。そこで、各単元や題材の学習に際しては、「何ができるようになるか」を明確にした指導目標や計画を立案し、生徒が身に付いた学力を的確に評価することを意識している。そうした実践については、毎年6月に開催している研究発表会やその後の各種研究会等で、研究成果の発信に努めている。

1 実践事項への取組

(1) 見方・考え方を働かせる学習指導の充実

理科の例を示す。この授業は、1年生「大地が揺れる」の単元の2時限目の授業である。

働かせたい見方・考え方

理科における見方・考え方は、「自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること」であるが、この授業において働かせたい見方・考え方を「地球に関する現象を、主として時間的・空間的な視点で捉えること」とした。

授業の流れ

【学習課題を把握する場面】では、

「地震計の記録に示された波形は何を表しているのだろうか」という課題を設定するため、各地の地震計の記録から共通点を見いださせることにより、課題に迫っていった。はじめの小さな揺れと後からくる大きな揺れについて、P波（縦波）とS波（横波）のどちらによるものかを考えさせ、本時の課題へとつなげていった。



【学習課題に取り組む場面】では、本時に行う実験についての予想を確認した後実験を行い、結果をまとめる。そして、実験結果と地震計の記録を用いて、地震の揺れの大きさや波の伝わり方の規則性を見いだせる。

【共有する場面】においては、見つけた規則性について、根拠を明らかにしながら発表させる。その際、どのような見方・考え方が働いたかを確認しながら進める。

【発展させる場面】では、近年起こると予想されている南海地震に関する問いを解くことを通して緊急地震速報の仕組みについて考え、発表させる活動をもつ。この活動は、本時の学習を日常生活とつなげるものである。

【学習課題を把握する場面】

《学習課題》地震計の記録に示された波形は何を表しているのだろうか

【学習課題に取り組む場面】

《Step1》実験に対する予想を立てる。
《Step2》実験を行い、結果を整理する。
《Step3》実験結果を基に、規則性を見つけまとめる。

【共有する場面】

根拠を明確にしなが意見を発表する。

【発展させる場面】

近年起こると予想されている南海地震についての問いを解くことを通して緊急地震速報の仕組みについて考える。




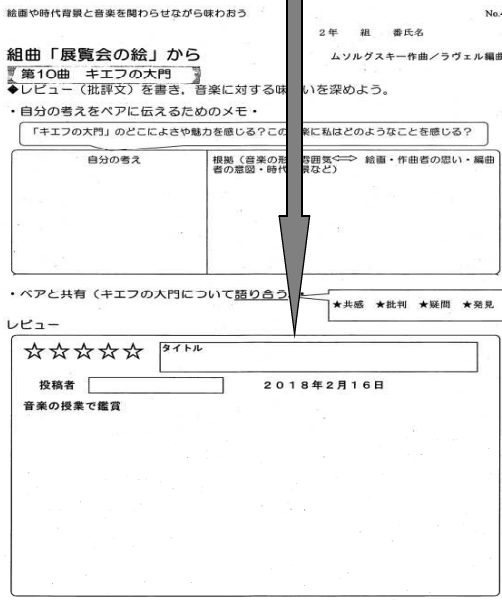
(2) 「何ができるようになるか」を意識した指導と評価

音楽科の例を示す。この授業は、2年生の鑑賞「展覧会の絵」の4時限目の授業である。

この授業の目標

曲想と音楽の特徴との関わりや音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、絵画との関わりを理解しながら、音楽に対する自分の考えをもち、よさや美しさを味わって聴く。

評価する場面

時間 (分)	学習活動 ※ ㊦ ㊧はその活動で働かせる見方・考え方	指導の手立て ㊦は見方・考え方を働かせるための手立て
20	<p>4 共有したことをもとに、再度音楽を聴き、音楽に対する自分の考えをまとめる。</p> <p>㊦ ㊧ 音楽の全体の構成に着目して音楽を捉えている。</p> <p>㊦ ㊧ オーケストレーションに着目し音楽を捉えている。</p> <p>㊦ ㊧ 楽曲のそれぞれの部分を特徴付けている音楽の要素（旋律・強弱・速度・リズムなど）に着目し音楽を捉えている。</p> <p>㊦ ㊧ 音楽の特徴と絵画や時代背景、作曲者の思いなどと関連付けて解釈している。</p> <p>㊦ ㊧ 音楽に対して自分の価値付けをし、解釈している。</p> 	<p>・《 step3 》でのワークシートの記述や【共有する場面】での仲間の考えを参考にし、自分の考えをまとめさせる。</p> <p>㊦ 共有の場面にペアで伝え合った内容を全体で紹介させ、着目しているポイントを板書に提示する。</p> <p>㊦ 初感の自分の考えを振り返り、これまでの学習内容を踏まえながら、批評文（レビュー）を記述させる。</p> <p>＜評価＞曲想と音楽の特徴との関わりや音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、絵画との関わりを理解しながら、音楽に対する自分の考えをもち、よさや美しさを味わって聴いているか。</p> <p>(ワークシート・観察)</p> 

十分満足できると判断される具体的な状況

曲想と音楽の特徴との関わりを感じ取り、音楽の特徴とその背景となる絵画や時代背景、作曲者の思いを複合的視点で捉え、よさや美しさを味わって聴いている。

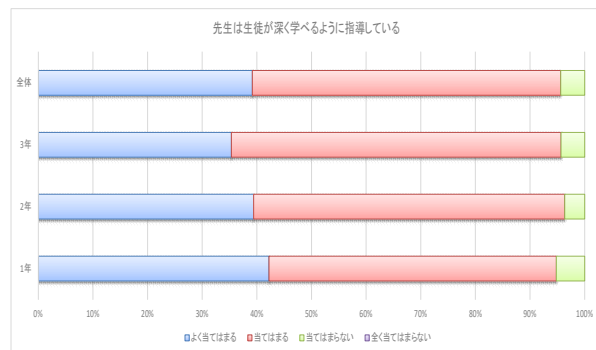
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は生徒が深く学べるように指導している」目標90%以上（本年度から）

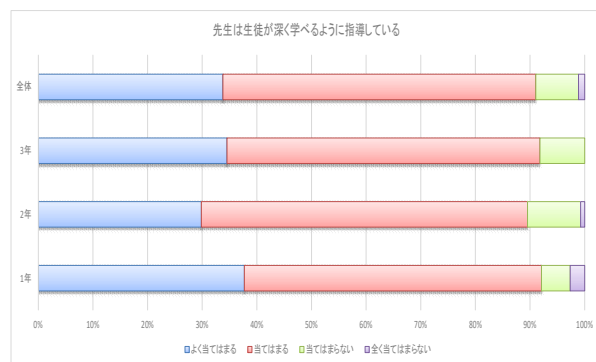
第1回（7月） 95.62%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	57	54	41	152
当てはまる	71	78	70	219
当てはまらない	7	5	5	17
全く当てはまらない	0	0	0	0



第2回（12月） 91.06%

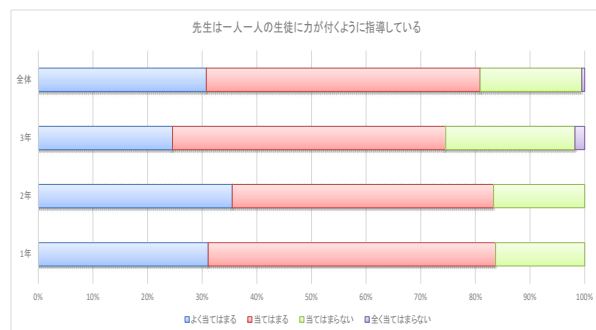
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	43	40	38	121
当てはまる	62	80	63	205
当てはまらない	6	13	9	28
全く当てはまらない	3	1	0	4



「先生は一人一人の生徒に力が付くように指導している」目標90%以上（本年度から）

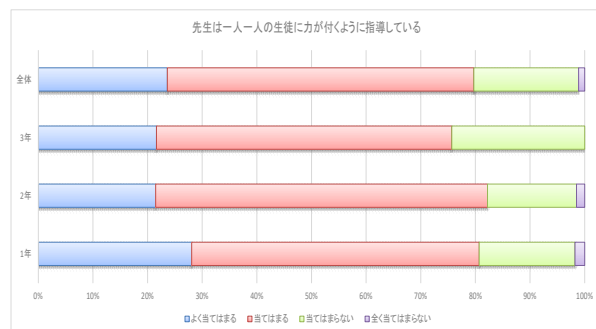
第1回（7月） 80.88%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	42	49	28	119
当てはまる	71	66	57	194
当てはまらない	22	23	27	72
全く当てはまらない	0	0	2	2



第2回（12月） 79.72%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	32	29	24	85
当てはまる	60	82	60	202
当てはまらない	20	22	27	69
全く当てはまらない	2	2	0	4



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 見方・考え方を働かせる学習指導の実現

当初申告	最終申告	評価
見方・考え方を明確にした新たな授業実践を、学期に1度行う。	前・後期に1度ずつ見方・考え方を明確にした授業を実施したころ、生徒は意欲的に学習に取り組んだ。	A
習得した知識を活用し、見方・考え方を働かせた深い学びの実現をねらいとする授業を開発し、年間に3回行う。	深い学びの実現をねらいとする授業が3回以上実践することができた。	A
各学期に1度、自分が開発した発信型の教材を使った授業を行う。	相手を意識したスピーチやテレビ会議、詩の作成などを実施し、相づち表現などを用いることができるようになってきた。	A
各単元で主に働かせる見方・考え方を明確にし、各領域で1回以上「共有の場面」を工夫した授業を行う。	各章について、主に働かせる見方・考え方を一覧表にまとめ、実践した領域では、「共有の場面」で付箋カードを活用した授業を行った。	B
各単元で働く見方・考え方を明確にし、板書の中でそれがわかるように示していく。	見方・考え方を板書に示してきたが、教師主導で示していたので、生徒に問いかけ引き出して示すようにする。	B

イ 「何ができるようになるか」を意識した指導と評価

当初申告	最終申告	評価
各単元で「学習計画書」を作成し、最初にどのようなことを学んでいくかを確認し、最後に何を学ぶことができたかを振り返らせるようにする。	一年間を通して「学習計画書」を配布し授業を行うことができた。振り返りもさせたが、十分に時間をとることができなかった。	A
題材における学習過程の振り返りを生徒自身ができる「振り返りシート」の充実を図る。	一つの文脈としての振り返りに留意したワークシートを作成し、色ペンを活用しながら記入させた。	B
見方・考え方を働かせた思考力等を評価できるワークシートを作成する。	生徒の思考力等をワークシートの記述から見取るため、ループリック（想定される記述内容を評定段階に区分した表）を作成し、公正な評価に役立てた。	B
自分の学習を振り返るためのシートを2か月に1回程度の割合で記入させ、「何ができるようになったか」を意識させる。	継続して実施し、求められていることに対する自己チェックはできたが、生徒の実態に応じたリストを作成する必要がある。	B
見方・考え方が見え隠れするワークシートを作成する。	見方・考え方を身に付けさせるワークシートを作成したが、思考の流れが可視化できるよう改良が必要である。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 新学習指導要領で示された授業改善の視点を取り入れた学習指導を各教科で実施し、学校全体で研究に取り組んでいる。毎年開催している研究発表会の参加者や、本校の取組を視察に来る学校が増え、研究の成果を広めることができている。
- 保護者対象アンケートやオープンスクール時のアンケートにおける「楽しく分かりやすい授業」に関する項目の評価が高い。各教科における学習指導に関する取組が、保護者や地域の方には支持・信頼されている。
- 全国学力・学習状況調査の知識・活用問題における平均正答率が、ともに全国国公立中学校の平均正答率を大きく上回っている。

(2) 改善を要する点（課題）

- 各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせた「主体的・対話的で深い学び」の実現によって、どれだけ力が身に付いたかを分かりやすく示す必要がある。
- 主体的に学習に取り組む態度を育成するため、各教科で単元・題材を貫く問いや学習課題設定の在り方を工夫し、学びに向かう力を高める。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 いじめの防止

平成25年6月に公布された「いじめ防止対策推進法」では、「いじめとは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義している。その上で、学校は、その学校の実情に応じ、いじめの防止等のための対策に関する基本的な方針「学校いじめ防止基本方針」を定めるものとするとして規定している。さらに、学校におけるいじめの防止として、児童等の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならないと定めている。

本校では平成26年3月に、「学校いじめ防止基本方針」を定め、いじめの防止・早期発見・対処に組織的に取り組んできた。取組の評価として、年3回実施するいじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われた否かを検証し、期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。

平成29年から、いじめを幅広く捉えるようになり、本校でも「学校いじめ防止基本方針」を一部修正し、いじめの防止・早期発見・対処をより徹底するようにした。具体的には、「ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で的確に関わり、いじめを隠したり、軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する」ことを徹底し、いじめ防止のための組織や相談体制を強化した。いじめ防止を担当する教員を、生徒指導担当とは別に配置し、附属小学校と兼務することによって、小学校との接続や連携をより強化できるようにした。また、これまで年3回実施していたアンケート調査を、原則毎月1回実施することで、早期発見に努めるとともに、結果を周知する際に、担当者から生徒へ向けたメッセージを加えることで、学校の思いを伝えるようにした。相談体制についても、週1回のスクールカウンセラーによる相談だけでなく、いつでも相談できる体制として、相談窓口の周知や、スクールカウンセラーに繋ぐ相談箱の設置等を行った。

<いじめの防止のための組織や体制> 「附属中学校いじめ防止基本方針」から

いじめの防止等の対策のための組織（生徒指導委員会）

① 組織の構成

管理職員、主幹教諭、生徒指導主事、いじめ防止担当、学年主任、養護教諭により構成し、この組織を生徒指導委員会と称する。個々のいじめの防止・早期発見・対処に当たっては、その事案に関係の深い学級担任、部活動指導者等の教職員、及びスクールカウンセラーを追加する。なお、必要に応じて、心理、福祉等に関して専門的な知識を有する大学教職員等の助言を得る。

② 組織の役割

- 学校基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正を行う。
- 生徒・保護者や教職員からのいじめの相談・通報の窓口となり、報告を受ける。
- いじめの疑いに係る情報や生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う。
- 緊急会議を開いて、いじめの情報の迅速な共有、関係のある生徒への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携を行う。

教育相談体制

- 教職員、生徒及び保護者、さらには生徒間の好ましい人間関係の醸成に努める。
- 生徒の個人情報に配慮するとともに、「教職員に相談すれば、秘密の厳守はもとより、教職員は必ず自分を助けてくれる。」という安心感や信頼感の醸成に努める。
- 定期的な教育相談（二者面談・三者面談）週間や相談日等を設定するなど、生徒はもとより、保護者も気軽に相談できる体制を整備し、保護者からの相談を直接受け止められるようにする。
- 相談の内容によっては指導を継続し、必要に応じて医療機関等の専門機関との連携を図る。
- 生徒や保護者に対して、広く教育相談が利用されるよう、学校の内外を問わず多様な相談窓口について広報・周知に努める。

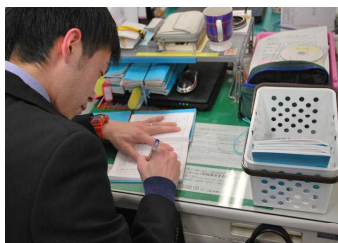
1 実践事項への取組

(1) 居心地のよい雰囲気づくり

ア 安心感の醸成

生徒が生き生きと学校生活を送るためには、自分の存在が認められ、周囲から見守られている安心感が基盤となる。そのため教職員は、生徒のことを理解するように努めている。

朝の登校時から授業中や休み時間も、生徒の様子を観察しながら、安心して生活できるようにサポートしている。また、生徒は、毎日の出来事や感じたことを日記に書いて来て、朝の会で学級担任に提出する。学級担任は、授業の空き時間に職員室で日記に書かれていることを読み、コメントを書いて帰りの会で返す。その中で、友人関係や進路等に関する悩みを書いている生徒もあり、気になる生徒に対しては、直接話を聞くようにしている。そして、放課後には、気になる生徒や欠席していた生徒の家庭へ連絡し、安心して登校できるように働きかけている。



イ 教室環境の整備

学校が生徒にとって居心地のよい場所であることが、いじめや不登校を生まないことにつながる。そのためには、生徒にとっての人間関係がなりより重要であるが、人間関係をつくる場である教室等の環境を整備し、居心地のよさをつくることも必要である。

各学級の教室には、生徒一人一人の作品だけでなく、担任の思いを伝えるメッセージやクラスの歩みを確認する写真等も掲示し、所属意識を持たせるようにしている。

特別教室も、その教室の使用目的に応じた掲示物や机の配置等を工夫し、学級以外にも身を置ける居場所として利用しやすくしている。



教室背面の掲示物



図書室の配置



相談室の様子

ウ 相談体制の構築

生徒は悩みを持ったとき、誰かに相談することができれば、解決するまでには至らずとも気持ちが軽くなることができる。毎日の日記以外にも、定期的に行う生徒と学級担任との二者面談や、無記名で行う学校生活アンケート等、悩みを打ち明ける機会を設けている。

また、教育相談の専門性を持ち、学級担任や学校の教員とは少し違う立場から生徒や保護者の相談を受けるスクールカウンセラーが、週1回来校している。そのスクールカウンセラーにも気安く相談できるように、月1回の通信を教室に掲示し、カウンセラーあての相談箱を設置している。



通信の発行



相談箱の設置

(2) 生徒同士が繋がる活動の工夫

ア ペア学習やグループ活動

各教科の授業の中では、他者との意見交流を図ることで、より確かな知識を獲得させたり多面的な考え方を身に付けさせたりするために、二人組のペア学習や3～6人組のグループ活動を取り入れている。自分の考えを伝え相手の考えを理解することは、よりよい人間関係を築いていく力を育てることにもつながっている。



イ グループエンカウンター

生徒同士が本音を出し合い、相手を受け入れ相互理解を深めていく手法として、グループエンカウンターがある。これは、リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを確認することを通して、親密な人間関係を構築していくねらいがある。本校では学級ごとに、帰りの会や週1回の学級活動の時間を利用して、グループエンカウンターやレクリエーションを取り入れている。次は、その例である。

「誕生日チェーン」学級の生徒全員が、生年月日の早い順に並ぶ。ただし、相互の誕生日を確認するのは無言で行う。

「リフレーミング」短所を長所に言い換えた表現を考える。

(例) おしゃべり→社会的、意志が弱い→柔軟性が高い

「無言で図形」一人がある図形を相手に見せずに言葉だけで伝え、相手は伝えられた図形を紙に描く。最初は質問せずに描き、次に質問しながら完成させる。



ウ 学年球技大会

毎年、生徒から球技大会を開催したいという要望が出ていたが、学校の年間計画の中で、新たに球技大会を実施するのは難しかった。そこで、3年生保健体育の中の選択制授業を工夫して、学年だけの球技大会を実施した。

種目ごとに、審判や運営等の企画の原案を体育委員が立案し、応援も含めて役割を分担して行った。学級の結束力が高まり、試合も盛り上がった。



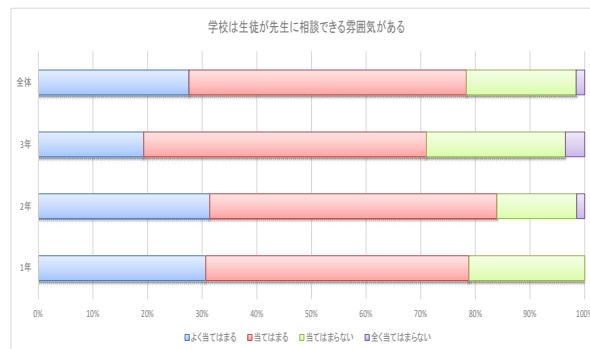
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は生徒が先生に相談できる雰囲気がある」 目標80%以上（昨年75.7%）

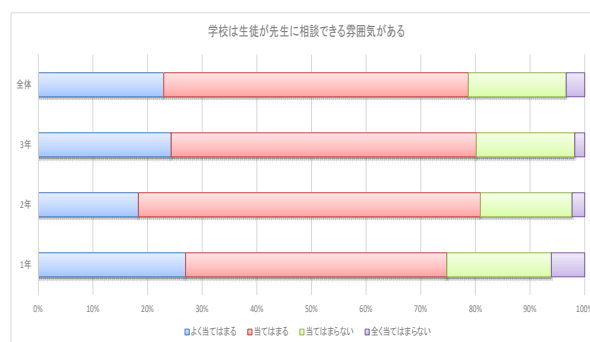
第1回（7月） 78.35%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	42	43	22	107
当てはまる	66	72	59	197
当てはまらない	29	20	29	78
全く当てはまらない	0	2	4	6



第2回（12月） 78.71%

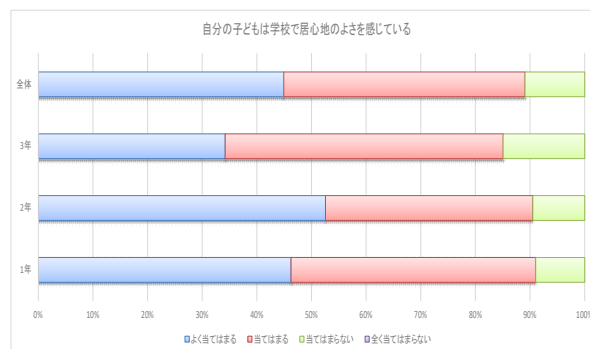
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	31	24	27	82
当てはまる	55	82	62	199
当てはまらない	22	22	20	64
全く当てはまらない	7	3	2	12



「自分の子どもは学校で居心地のよさを感じている」 目標85%以上（本年度から）

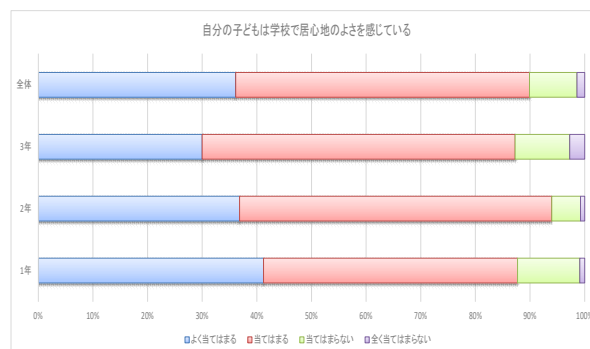
第1回（7月） 89.10%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	62	72	39	173
当てはまる	60	52	58	170
当てはまらない	12	13	17	42
全く当てはまらない	0	0	0	0



第2回（12月） 89.92%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	47	49	33	129
当てはまる	53	76	63	192
当てはまらない	13	7	11	31
全く当てはまらない	1	1	3	5



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 居心地のよい雰囲気づくり

当初申告	最終申告	評価
毎日、朝や昼休みの見守りに努め、生徒と関わる時間をできる限り持つようにする。	学年団が協力しあい、休み時間等の見守りは徹底して行うことができ、生徒とのコミュニケーションが図れた。	A
毎朝、プロジェクターで生徒の活動や日記の記述を紹介し、自己肯定感を高めるようにする。	一年を通して継続することができ、学校生活を気持ちよくスタートさせることができた。	A
学級目標や担任の思いを全体で共有するため、背面黒板に1か月に1回以上書き換える。	その時々担任として伝えたいことや学級の雰囲気を居心地よく保つための言葉を1か月に1回は書き換えた。	A
授業開始前や昼食後に、できる限り生徒と共に過ごす時間をつくり、生徒理解に努める。	休み時間等に生徒と触れ合う時間を確保できた。	B
帰りの会において週3回以上、生徒の日記から学校生活での思いや努力を紹介する。	帰りの会で生徒の日記から日々の生活や思いを拾い上げ、紹介した。	B

イ 生徒同士が繋がる活動の工夫

当初申告	最終申告	評価
協力して課題に取り組み達成感を感じることができるグループタスクを行う。	グループで協力して調べたり議論したりすることで、生徒同士が関わることや反応がよくなった。	A
帰りの会で曜日ごとのレクリエーションを行い、生徒の意見も取り入れて楽しい時間を過ごせるようにする。	年間を通して木曜日を除く週4回のレクリエーションを行い、楽しい時間をつくることができた。	A
毎週木曜日の帰りの会にグループエンカウンターを実施し、生徒の人間関係の醸成に努める。	授業での班学習や清掃等の班活動がより積極的に行えるようになり、効果の手ごたえが得られた。	B
週1回の学級活動の時間を利用して、アサーションやグループエンカウンターの実施する。	学級活動でリフレーミングカードを作成したりグループエンカウンターを行ったりして、クラスが盛り上がった。	B
学活では自分や学級を見つめ直す機会とし、生徒自身が話し合いを進行することで自治の精神や集団としての自覚を育てる。	生徒主体の話し合いができるようになり、学級の団結力も強まって「クラスの仲が良い」という声がよく聞かれるようになった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 授業の中での話し合い活動やグループ活動を充実させ、日常的に人間関係が良好に保てるように取り組んでいる。
- 保護者対象アンケートや全国学力・学習状況調査の生徒質問における「楽しい学校生活」に関する項目の評価が高い。
- いじめ防止担当者を配置し、スクールカウンセラー等と連携した相談体制の充実や小学校との連携強化に取り組んでいる。

(2) 改善を要する点（課題）

- 生徒にとって居心地のよい環境や雰囲気をつくるとともに、よりよい人間関係を築く力が身に付く指導を充実させ、いじめや不登校の未然防止に取り組む。
- 道徳教育や人権教育、情報モラル教育に力を注ぎ、人権意識を醸成し多様な価値感を認めるとともに、他者と比較しなくとも得られる自己肯定感を高める。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 キャリア教育の推進

平成23年1月に、中央教育審議会の答申である「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」が取りまとめられ、キャリア教育の新たな方向性や発達段階に応じたキャリア教育の充実方策が示された。その中で、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。

従来型の進路指導は、入試が終われば進路指導は終わるという、集中的な支援として捉えられていたが、キャリア教育では、生涯を通じた人間形成という視点から指導することが必要となる。また、幼稚園から高等学校へとキャリア教育を進める中で、中学校段階においては、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方について考えさせるために、職場体験等の体験的な学習活動を通して、現実の社会を学ぶ活動を推進することが大切である。

本校では、キャリア教育目標として「学校や家庭や地域社会の中で、自分の役割を果たしながら将来に夢をもって生きる生徒の育成」を掲げ、職場体験や進路指導等に特化したものではなく、日常の教育活動の中で「かかわる力・みつめる力・すすむ力・えがく力」を育成することを目指し、重点目標の一つに掲げている。

鳴門教育大学附属中学校 キャリア教育全体計画

保護者の願い ・大学の附属学校であることの特長を生かした教育活動。自己実現へ向かう調和的人格の伸長。	学校教育目標 知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすやかな中学生を育成する。	生徒の実態 ・全国学力調査の質問紙調査「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」において、肯定的回答が大変多い。一方で、「今住んでいる地域の行事に参加している」において、肯定的回答の割合が少ない。	
地域や産業界の願い ・勤労意欲をもち、社会貢献に寄与することができるリーダーとしての資質の育成。	目指す生徒像 ・目標をもち、自主的、創造的に学ぶ生徒 ・強靱な意志と身体をもち、たくましく生き抜く生徒 ・優しく思いやりの心をもち、人につくす生徒		
本年度の重点目標			
社会に生きて働く思考力等の育成 文部科学省の指定研究を生かして、社会に生きて働く思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業を創造し、研究の成果の普及を図る。	いじめの防止 授業等における言語活動やグループ活動を充実させたり、道徳科や短学活の指導を工夫したりして、相互理解を進める。	キャリア教育の推進 教育実践を通して目指す生徒の具現化や、役割を明確にして係活動を徹底することで、自分らしい生き方の実現を図る。	
キャリア教育目標(目指す生徒像)			
○ 徳島県のキャリア教育目標:「夢や目標をもって努力し、主体的・協同的に学び続ける生徒の育成」 ○ 本校のキャリア教育目標:「学校や家庭や地域社会の中で、自分の役割を果たしながら将来に夢をもって生きる生徒の育成」			
キャリア教育で育成すべき能力・態度			
かかわる力	みつめる力	すすむ力	えがく力
人間関係形成・社会形成能力 ・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ・人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を養う。 ・リーダーとフォロワーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。	自己理解・自己管理能力 ・自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悩みを話せる人を持つ。	課題対応能力 ・自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 ・よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。	キャリアプランニング能力 ・生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し活用する。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 ・進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。
各学年における重点目標			
1学年 ・自分の良さや個性が分かる。 ・自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。 ・集団の一員としての役割を理解し、果たそうとする。 ・将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。	2学年 ・自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。 ・社会の一委員としての自覚が芽生えるとともに社会や大人を客観的にとらえる。 ・将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し、模索する。	3学年 ・自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進める。 ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ・将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服するための努力に向かう。	

1 実践事項への取組

(1) 気持ちのよい挨拶の実践

将来、社会的・職業的自立を目指す生徒にとって、学校もまた、生徒にとって一つの社会的集団である。その社会的集団の中で、自らの役割や働き方について体験的に考えさせることは有効である。そこで、昨年度は清掃活動に焦点を当て、自分の役割を果たしながら他者とかかわり、集団に貢献していく態度を培うようにした。その結果、清掃への意識はある程度高まったが、実践においては、まだ十分ではなかった。そこで本年度は、まず他者とかかわる上で基本的な態度となる挨拶に焦点を当てた。気持ちのよい挨拶を通して、かかわる力を身に付け、学校の中で自立した生活を送る態度を培うことに取り組んだ。

ア 朝のあいさつ運動

歴代の生徒会役員は、毎朝登校時に正門付近で挨拶を交わす「朝のあいさつ運動」を公約に掲げ、熱心に行ってきた。本年度はこの運動を、生徒会役員や一部の有志に任せるのではなくフォロワーにも働きかけ、チームとして「あいさつ運動」を盛り上げるようにした。具体的には、学級単位で参加する日を決め、生徒会役員と一緒に挨拶を行った。



イ 授業の挨拶

本校は毎年、研究発表会や研究視察で多くの来校者が訪れる。そこで、本年度当初に研究委員会が、授業規律の確認と徹底を提案した。その中で、授業開始と終了の挨拶を、気持ちよく行うことを確認した。挨拶の意味を生徒に問いかけ、お互いに納得した上で取り組んできた。教科や教室によって違いはあるものの、挨拶の励行を心掛けてきた。



ウ 部活動の挨拶

部活動は、学級とは違い、先輩や後輩といった学年を越えた関係性がある集団である。また、同じ目的や目標を掲げ、それぞれの役割を果たしたり協力したりしながら取り組んでいく集団でもある。部活動が持つ教育的効果は大きく、その中でも人間関係を形成する力が養われる機会が多い。そこで、その基盤となる挨拶を、各部で徹底するように取り組んだ。



(2) 家庭や地域との連携を深める取組

ア 家庭との連携

本校は毎月1回の割合で、保護者に来校してもらえる参観日や行事を設定している。参観日の出席率は高く、85%近いときもある。また、毎月1回の「学年だより」や、毎月1～3回の「学級通信」を発行している。こうした通信には、生徒の学校での様子だけでなく、保護者や家庭でも考えていただきたい内容を掲載しすることもある。

イ 地域との連携

「様々な職業の講話」

本校では、平成14年度から「生き方を考える時間」として、外部講師の講話を聴く機会「LFT (Live Fuchu Time)」を設けてきた。これまでは、大学の先生方に講師を依頼し、学問との出会いや専門分野の内容を話していただくことが多かった。本年度は、本校の卒業生や本校に関係のある様々な職業に従事している方を講師に招聘し、中学校時代のこと、仕事を始めたきっかけや仕事の内容、やりがい、生徒へのメッセージ等を話していただいた。生徒にとって身近な方の話であり、自分の将来や生き方を考える機会になった。講師と演題は次のとおりである。

近藤洋祐（电脑交通）「生き方を考える」

木内宏（関西テレビ放送徳島支局）「テレビ・ラジオに懂れて」

西川弘祐（日乃出本店）「人のために動くこと」

山上紘規（徳島大学病院）「中学生の皆さんに伝えたいこと」

森川大伍（アイエスエイ）「附中生の知らない旅行添乗員の世界」

河野美枝子・森本みどり（徳島県歯科衛生士会）「歯科衛生士とは」

城田佐和子（Chaa Music）「創立70周年記念コンサート」



「ボランティア部によるゴミ拾い」

本校のボランティア部は、校外のスポーツクラブ等で活動している生徒等が入部し、日頃は校内美化を中心に、自分ができる時間にできることを行っている。また、これまでは学期に何回かは全員で活動する機会を設けてきた。

本年度は、夏休みにその機会を設け、校外に出かけてゴミ拾いを行った。



「清掃奉仕作業」

これまで夏期休業中の学年登校日には、保護者にも呼びかけ、親子で清掃作業（除草）を行ってきた。本年度はこれに加えて、夏季休業中に行われた地域の清掃奉仕作業に、その日部活動に登校してきた生徒が参加した。地域の方と一緒に、学校周辺の溝に沿って除草を行った。短時間ではあったが、地域の方から感謝の言葉をいただき、勤労の尊さを感じた。



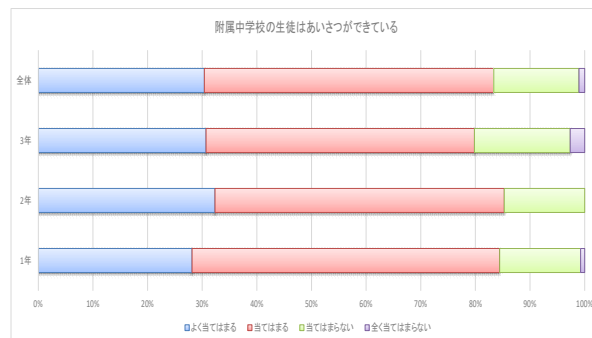
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「附属中学校の生徒はあいさつができています」目標90%以上（昨年83.0%）

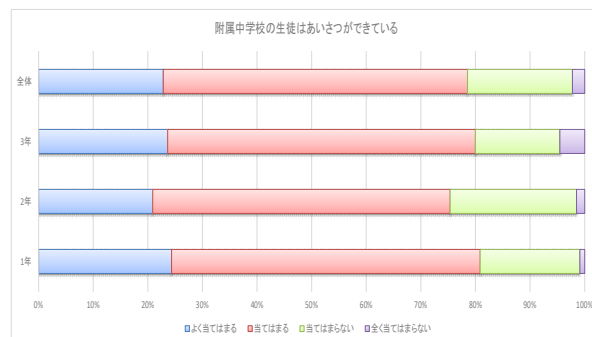
第1回（7月） 83.38%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	38	44	35	117
当てはまる	76	72	56	204
当てはまらない	20	20	20	60
全く当てはまらない	1	0	3	4



第2回（12月） 78.55%

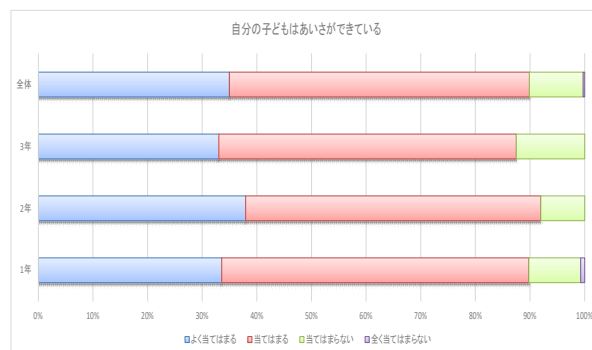
	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	28	28	26	82
当てはまる	65	73	62	200
当てはまらない	21	31	17	69
全く当てはまらない	1	2	5	8



「自分の子どもはあいさつができています」目標85%以上（本年度から）

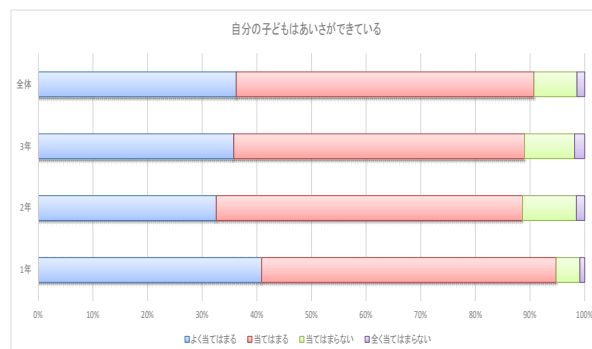
第1回（7月） 89.90%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	46	52	37	135
当てはまる	77	74	61	212
当てはまらない	13	11	14	38
全く当てはまらない	1	0	0	1



第2回（12月） 90.73%

	1年	2年	3年	全体
よく当てはまる	47	43	39	129
当てはまる	62	74	58	194
当てはまらない	5	13	10	28
全く当てはまらない	1	2	2	5



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 気持ちのよい挨拶の実践

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
毎朝、登校してくる生徒に気持ちのよい挨拶を行う。	朝の挨拶では、気持ちのよいものになるように、目を見る、体を向けるなど、相手を意識して挨拶を行った。	A
元気で爽やかな挨拶のよさを感じられるように、一人一人の名前を呼んで挨拶をする。	朝に限らず、休み時間にもその日初めて会う生徒には挨拶をしてきた。	A
学級の三役を中心に、あいさつ運動や朝の清掃活動に取り組みせ、学年全体に広がりが生まれるようにする。	後期に入り、朝の清掃やあいさつ運動に参加する生徒が少し増えた。生徒とのコミュニケーションの機会が増えればよい。	B
部活動では、保護者や地域の方にもきちんとした挨拶ができるようにするため、毎日の練習から姿勢を正した挨拶を指導する。	姿勢を正した挨拶はできているが、保護者や地域の方への挨拶にもつながるよう、指導を徹底する必要がある。	B
授業中、相手の目を見て元気よく挨拶させる。	ペアで対話するとき必ずアイコンタクトをとるように意識させたが、一部の生徒はまだできていない。	B
授業の前後の挨拶を、生徒が落ち着いた状態になってから行うようにする。	挨拶の前は一度無言の状態をつくり、それから挨拶をするように意識して行った。	B

イ 家庭や地域との連携を深める取組

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
週1回発行の学級だよりを通じ、級友や教師の思いを共有して相互理解を深めるとともに、家庭への啓発や連携を図る。	週1回の学級だよりを発行し、三者面談では約9割の保護者から「読んでいる」と回答を得て、話題に上がることもあった。	A
学級通信では進路のコーナーを設け、今の段階で考えたり行動したりすることを紹介する。	進学に関することを紹介できたとともに、三者面談でも家庭学習の持ち方や学習方法について話げできた。	A
保護者の言葉を共感的に受け止めて、明るい挨拶や丁寧な対応を心がける。	保護者とは良好な関係を築けつつある。	B
ボランティア部において地域のゴミ拾い活動を取り入れる。	夏休みに地域のゴミ拾いに出かけたり、地域の方と一緒に奉仕作業を行ったりした。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- キャリア教育で育成すべき能力・態度「かかわる力、みつめる力、すすむ力、えがく力」を意識した教育実践に取り組んだ。具体的には、3日間の職場体験学習を充実させたり、日々の係活動を徹底させたりしながら、キャリア教育に取り組んでいる。
- 挨拶の実践を掲げ、生徒会へも働きかけながら、学校生活全般において挨拶への意識の向上に取り組んでいる。
- 大学教員や卒業生を講師として招聘し、幅広い分野の講話を依頼することで、生徒の将来や仕事に対する意識を高めている。

(2) 改善を要する点（課題）

- 気持ちのよい挨拶はまだ定着しておらず、時間を守ることや物を大切にすること等にも課題があるため、引き続き生徒に響く指導を徹底する。
- 将来を見通し自己実現を図るためのプランをえがくことができるように、様々な機会を捉えて未来へ向かう意識を持たせる指導に努める。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	添付	別添	資 料 名	備考
1	1・2・3	参考資料1	○		平成29年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	
2	1・2・3	参考資料2		○	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3		○	平成29年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4		○	平成29年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5		○	平成29年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収
6	1・2・3	参考資料6		○	平成29年度オープンスクールアンケート 結果	資料回収